轡をガリ、と頬張る思で、馬の口にかぶりついた。が、甘さと切なさと恥かしさに、堅く成つた胸は、自から溝の上へのめつて、折れて、煎餅は口よりも却つて胃の中でボリ〳〵と破れた。

突出た廂に額を打たれ、忍返の釘に眼を刺され、赫と血と丶もに總身が熱く、忽爾、罪ある蛇に成つて、攀上る石段は、お七が火の見を驅上つた思がして、頭に映す太陽は、血の色して段に流れた。

宗吉は恁くて又明神の御手洗に、更に、氷に閉らる丶思して、悚然と寒氣を感じたのである。

「くす〳〵、くす〳〵。」

花骨牌の車座の、輪に身を捲かる丶、危さを感じながら、宗吉が我知らず面を赤めて、前餅の袋を渡したのは、甘谷の手で。





「おつと來た、めしあがれ。」

と一枚めくつて合せながら、袋をお千さんの手に渡すと、此は少々疲れた風情で、なかまへは入らぬらしい。火鉢を隔てたのが請取つて、膝で覗くやうにして開けて、

「御馳走樣ですね……早速お毒見。」

と言つた。

此に又胸が痛んだ。だけなら、まだ然ほどまでの仔細はなかつた。

「くす〳〵、くす〳〵。」

宗吉か此の座敷へ入りしなに、最う其の忍笑ひの聲が耳に附いたのであるが、此の時、お千さんの一枚撮んだ煎餅を、見ないやうに、一寸傍へかはした宗吉の顏に、横から打撞つたのは小皿の平四郎。……頬骨の張つた菱形の面に、窪んだ目を細く、小鼻をしかめて、

「くす〳〵。」

と又遣つた。手のわるさに落ちたと見えて札は持たず、鍍金の銀煙管を構えながら、めりやすの股引を前はだけに、片膝を立て〻居たのが、其の膝頭に頬骨をたゝき着けるやうにして、

「くす〳〵くす。」

續けて忍笑をしたのである。

立續けて、

「くッくッくッ。」

（七）

「此方は、びきを泣かせて遣れか。」

と黄八丈が骨牌を捲ると、黒縮緬をの坊さんが、紅い裏翻然と翻して、





「餓鬼め」

と投げた。

「うふ、うふ、うふ。」と平四郎の忍笑が、齒莖を洩れて聲に出る。

「うふゝ、うふゝ、うふゝゝゝゝ。」

「何ぢやい。」と片手に猪口を取りながら、黒天鵞絨の蒲團の上に、萩、菖蒲、櫻、牡丹の合戰を、どろんとした目で見据えて居た、大島揃、大胡座の熊澤が、ぎよろりと平四郎を見向いて言ふと、笑の蟲は蕃菽を食つたやうに、赤く成るまで赫と兢勢つて、

「うはゝゝは、うふゝ、うふゝ。うふゝ。えッ、いや、あ、あ、チ、あはは〻〻は、はッはッはッ、テ、ウ、えッ、えッ、えッ、えへゝ、うふゝ、あは〳〵あは、あは、あは、ゝゝはゝゝ、あはゝゝゝ。」

「馬鹿な。」

と唇を横舐めずつて、熊澤がぬつと突出した猪口に、酌をしやうとして、銅壺から抜きかけた銚子の手を留め、お千さんが、

「何うしたの。」

「おほゝ、や、お尋ねでは恐入るが、あはゝ、テ、えッ、えへ、えへゝ、う、う、ちえッ、堪らない。あッはッはッ。」

「魔が魅したやうだ。」

と甘谷が呆れて呟く、……と寂然と成る。

寂寞と成ると、笑ばかりが、

「ちやはゝはゝ、う、はゝ、うふ、へゝ、はゝゝ、えへゝゝゝ、えッへ、へゝ、あはゝゝ、うは、うは、うはゝ。どッこい、えゝ、チ、ちやはゝ、エ、はゝゝは、はゝゝはゝ、うッ、うッ、えへッへッ。」





と横のめりに平四郎、煙管の雁首で脾腹を突いて、身悶えして、

「くッ、苦しい……うッ、うッ、うッふゝゝ、チ、うッ、うゝ〜苦しい。あゝ、切ない、あはゝはゝ、あはッはッはッ、おゝ、コ、こいつは、あはゝ、ちやはゝ、テ、チ、たッたッ堪らん。はゝゝ。」

と込上げ揉立て、眞赤に成つた、七顛八倒の息繼に、つぎ冷しの茶を取つて、がぶりと遣ると、

「わッ。」と咽せて、灰吹を掴んだが間に合はず、火入の灰へぷッと吐くと、むら〜と灰かぐら。

「あゝ、あの兒、障子ま一枚開けていな。」

と黒縮緬の袖で拂つて出家が言つた。

宗吉は針の莚を飛上るやうに、其のもう一枚。肘懸の障子を開けると、颯と出る灰の

吹雪は、すッと蒼空に渡つて、遙に品川の海に消えた。が、藏前の煙突も、十二階も、睫毛に一眸の北の方、目の下、一雪崩の崖に成つて、崖下の、ごみ〳〵した屋根を隔てゝ、日南の煎餅屋の小さな店が、油障子も覗かれる。

ト斜に、がッくりと窪んで暗い、崖と石垣の間の、遠く明神の裏の石段に續くのが、大蜈蚣のやうに胸前に畝つて、突當りに牙を嚙合はた如き、小さな黒塀の忍返の下に、溝から這上つた蛆の、醜い汚い筋をぶる〳〵と震はせながら、獸を嘗めるやうな形が、歴然と、自分が瞳に映つた時、宗吉は最早や蒼白に成つた。

此處から認られたに相違ない。

と思ふ平四郎は、涎と一所に、濡らした膝を、手巾で横撫でしつゝ、

「ふ、ふ、ふ、ふ。」……大歎息とゝもに尻を曳いたなごりの笑が、更に、ぐわら〳〵ぐわらと雷の鳴返す如く少年の耳を打つ！……





「お煎をめしあがれな。」

目の下の崖が切立てだつたら、宗吉は、お千さんの其の聲とゝもに、倒に落ちて其の場で五體を微塵にしたらう。

產の親を可懷むまで、眉の一片を庇つてくれた、其の人ばかりに恥かしい……

「一寸、宅まで。」

と息を呑んで言つた——宅とは露路の其の長屋で。

宗吉は、しかし、其の長屋の前さへ、遁隱れするやうに素通りして、明神の境內の彼方此方、人目の隙の隅々に立つて、飢さへ忘れて、半日を泣いて泣いて泣きくらした。

星も曇つた暗き夜に、

「おかみさん——床屋へ剃刀を持つて參りませう。次手がございますから……」

宗吉は故と格子戸をそれて、蚯蚓の這ふやうに臺所から、密と妾宅へおとづれて、家主

の手から剃刀を取つた。

間を隔てた床敷に、艶やかな影が氣勢に映つて、香水の薫は、つとはしり下にも薫つた。

が、寂寞して居た。

露地の長屋の赤い燈に、珍らしく、大入道やら、五分苅やら、中にも小皿で禿なる影法師が動いて、ひそ〳〵と聲の漏れるのが、目を忍び、音を彈る出入りには、宗吉のために、寧ろ僥倖だつたのである。

（八）

「何をするんですよ、何をするんですよ、お前さん、串戯ではありません。」

社殿の裏なる、穴茶店の蘆簀の中で、一方の柱に使つた片隅なる大木の銀杏の幹に凭掛つて、アハヤ剃刀を咽喉に當てた時、すツと音して、濡縞の袖で抱いたお千さんの姿は、





……宗吉の目に、高い樹の梢から颯と下りた、美しい女の顔した不思議な鳥のやうに映つた——

剃刀をもぎ取られて後は、茫然として、殆ど夢心地である。

「まあ！　可かつた。」

と、身を捻ぢて、肩を抱きつゝ、社の方を片手拜みに、

「虫が知らしたんだわね。いま、お前さんが臺所で、剃刀を持つて行くつて聲が聞こえたでせう、ドキリとしたのよ。……秦さん〳〵と言つたけれど、最う居ないでせう。何だかね、こんな間違がありさうな氣がして成らない、私。私、でね、すぐに後から驅出したのさ。でも何處つて當はないんだもの、鳥居前の彼處の床屋で聞いて見たの。まあね。……まるでお見えなさらないと言ふぢやあないの。しまつた、と思つたわ。半分夢中で、それでも私が此處へ來たのは神佛のお助けです。秦さん、私が助けるんだと思つちやあ不可い、

可ござんすか、可いかえ、貴方。……親御さんが影身に添つて居なさるんですよ。可ござんすか、分りましたか。」

と小兒のやうに、柔い胸に、帶も扱帶もひつたりと抱占めて、

「御覽なさい、お月樣が、あれ、佛樣が。」

忘れはしない、半輪の五日の月が黑雲を下りるやうに、莊嚴なる銀杏の枝に、梢さがりに掛つたのが、可懷い亡き母の乳房の輪線の面影した。

「まあ、此からと言ふ、……女にしても蕾のいま、何うして死なうなんてしたんですよ。——私に……私……えゝ、それが私に恥かしくつて、——」

其の乳の震が胸に響く。

「何の顯前餅の二枚ぐらゐ、貴方が掏賊でも構やしない——私はね、あの。……まあ、とに角、內へ行きませう。可顯梅に誰も居ないから。」





促して、急いで脫放しの駒下駄を搜る時、白脛に緋が散つた。お千も慌しかつたと見えて、宗吉の穿物までは心著かず、可恐い處を遁げるばかりに、息せいて手を引いたのである。

魔を除け、死神を拂ふ禁厭であらう、明神の御手洗の水を掬つて、雫ばかり宗吉の頭髮を濡らしたが、

「……息災、延命、息災延命。學問、學校、心願成就。」

と、手よりも濡れた瞳を閉ぢて、頸白く、御堂をば伏拜み、

「一口めしあがれ、……氣を靜めて——私も。」

と柄杓を重げに口にした。

「動悸を御覽なさいよ、私のさ。」

其の胸の轟きは、今より先に知つたのである。

「秦さん、私は貴方を連れて、最う彼處へは戻らない。……身にも命にもかへてね、お手傳をしますがね、……實はね、今明神様におわびをして、貴方のお頭を濡らしたのは——實は、あの、一度内へ歸つてね。……此の剃刀で、貴方を、そりたての今道心にして、一緒に寢やうと思つたのよ。——あのね、實はね、今夜あたり紀州のあの坊さんに、私が抱かれて、其處へ、熊澤だの甘谷だのが踏込むで、不義いたづらの罪に落さうと言ふ相談に……何うでも、と言つて乘せられたんです。

……あの坊さんは、高野山の、金高なお寶ものを賣りに出て來て居るんでせう。何處かの大金持だの、何省の大臣だのに賣つて遣ると言つて、だまして、熊澤が皆質に入れて使つて了つて、催促される、苦しまぎれに、不斷、何だか私にね、坊さんが厭味らしい目つきをするのを知つて居て、まあ、大それた美人局だわね。

私が弱いもんだから、身體も度胸も、づばぬけて強さうな、あの人をたよりにして、こ





んな身裁に成つたけれど、……そんな相談をされてからはね……其の上に、此の眉毛を見てからは……」

と、お千は密と宗吉の肩を撫でた。

「つく〳〵、あんな人が可厭に成つた。——そら、どか〳〵と踏込むでせう、貴方を抱いてちやんと起きて、居直つて、あいそづしをきつぱり言つて、夜中に直ぐに飛出して、溜飲を下げて遣らうと思つたけれど……どんな發機で、自棄腹の、彼の人たちの亂暴に、貴方に怪我でもさせた日にや、取返しがつかないから、といま胸に手を置いて、分別をしたんですよ。

さ、此のまゝ何處かへ行きませう。私に任して安心なさいよ。……貴方も吃とあの人たちに二度つき合つては不可ません。」

裏崖の石段を降りる時、宗吉は狼の帔を越して、花やかな都を見る氣がした。

「此處……然う……」

お千さんが茫爾して、麺前餅を買ふのに、晝夜帶み拙いたのが、安ものらしい、が、黄萠の金入。

「食べながら歩行きまう。」

「弱蟲だね。」

大通へ抜ける暗がりで、甘く、旦つ香しく、齧齒でこなしたのを、口移し……

（九）

宗吉が夜學から、徒士町のとある裏の、空瓶屋と襤褸屋の間の、貧しい下宿屋へ歸ると、引傾いだ濡椽づきの六疊から、男が一人擦違ひに出て行くと、お千さんはパッと障子を開





けた。が、最う床が取つてある……

枕元の火鉢に、はかり炭を繼いで、目の破れた金網を斜に載せて、お千さんが懐紙であふぎながら、豌豆餅を燒いてくれた。

そして熱いのを口で吹いて嬉しさうな宗吉に、浦里の話をした。

お千は、それよりも美しく、雪はなけれど、ちら〳〵と散る花の、小庭の濕地の、石炭殼につもる可哀さ、痛々しさ。

時次郎でない、頰被したのが、黒塀の外からヌッと覗く。

お千が脛白く、はつと立づて、障子をしめやうとする目の前へ、トンと下りると、つか〳〵と椽側へ。

「あれ。」

「おい、氣の毒だが一寸用事だ。」

と袖から蛇の首のやうに捕縄をのぞかせた。

膝をなへたやうに支きながら、お千は宗吉を背後に圍つて、

「……此の人は……」

「いや、小僧に用はない。すぐおいで。」

「宗ちやん、……朝の御飯はね、煮豆が買つて蓋ものに……紅生薑と……紙の敲がしてあ

りますよ。」

風俗係は草履を片手に、最う入口の襖を開けて居た。

お千が穿ものをさがすうちに、風俗係は内から、戸の錠をあけたが、軒を出ると、ひ

たりと腰縄を打つた。

細腰はふつと消えて、すぼめた肩が、くらがりの柳に浮く。

……其のお千には、最う疾に、羽織もなく下着もなく、膚たゞ白く縞の小袖の萎へたる





のみ。

宗吉は、跣足で、めそ〳〵泣きながら後を追つた。

目も心も眞暗で、河も處も覺えない。颯と一條の冷い風が、雷燈の細い光に櫻を誘つた

時である。

「旦那。」

とお千が立停まつて、

「宗ちやん——宗ちやん。」

振向きもしないで、うなだれたのが、氣を感じて、眉を優しく振向いた。

「……」

「姉さんが、魂をあげます。」——辿りながら折つたのである……懐紙の、白い折鶴が掌

にあつた。

「此の飛ぶ處へ、すぐおいで。」

ほつと吹く息、薄紅に、折鶴は却つて蒼白く、花片にふつと乘つて、ひら〳〵と空を舞つて行く……此が落ちた大な門で、はたして宗吉は拾はれたのであつた。

電車が上り下りとも殆ど同時に來た。

宗吉は身動きもしなかつた。

唯見ると、丸髷の女が、其の緋縮緬の傍へ衝と寄つて、いつか、肩ぬげつゝ裏の辻つた效性のない羽織を、上から引合はせて遣りながら、

「さあ、來ました。」

「自動車ですか。」

と目を睜つたまゝ、緋縮緬の女はきよろんとして居た。





## (十)

年少い驛員が、

「貴方がたは？」

と言つた。

乘り餘つた黒山の群集も、三四輛立續けに來た電車が、泥まで綺麗に浚つたのに、まだ待合所を出なかつた女二人、(別に一人)と宗吉をいぶかつたのである。

宗吉は言つた。

「此の御婦人が御病氣なんです。」

と、矢張り、けろりと仰向いて居る緋縮緬の女を、外套の肘で庇つて言つた。

驛員の去つたあとで、

「唯今、自動車を差上げますよ。」

と宗吉は、優しく顔を覗きつゝ、丸髷の女に瞳を返して、

「巣鴨はお見合せを願へませんか。……屹と御介抱申します。私は恁う言ふものです。」

なふだに――醫學博士――秦宗吉とあるのを見た時、……もう一人居た、散切で被布の女が、P形に直立してZの如く敬禮した、此は附添の雜仕婦であつたが――博士が、其の從弟の細君に似たのをよすがに、此より前、丸髷の女に言を掛けて、其の人品のゆゑに人をして疑はしめず、連は品川の某樓の女郎で、氣の狂つたゝめ巣鴨の病院に送るのだが、自動車で行きたい、それでなければ厭だと言ふ。其のつもりにして、すかして電車で來ると、此處で自動車でないからと言つて、何でも下りて、すねたのだと言ふ。……丸髷は某樓の其の娘分、女郎の本名をお千と聞くまで、――此の雜仕婦は物頂面して睨んで居た。





不時の回診に驚いて、或日、其の助手たち、其の白衣の看護婦たちの、ばら〳〵と急いで、然も、靜粛に驅寄るのを、徐ろに、左右に辭して、醫學博士秦宗吉氏が、

「いえ、個人で見舞うのです……皆さん、何うぞ。」

やがて博士は、特等室に唯一人、膝も、しどけない、けろんとした狂女に、何と……手に剃刀を持たせながら、臥床に跪いて、其の胸に額を埋めて、犇と縋つて、潸然として泣きながら、微笑みながら、身も世も忘れて愚に返つたやうに、だらしなく、涙を髯に傳はらせて居た。

蜻蛉集終

泉鏡花著作細表

著作細表

| | | | |
|---|---|---|---|
| 五月 | 明治二十六年 | 冠彌左衛門 | 京都日出新聞 |
| 仝 | | 活人形 | 春陽堂 |
| 六月 | | 金時計 | 博文館 |
| 九月 | 明治二十七年 | 窮鳥 | 北海道每日新聞 |
| 八月 | | 大和心 | 博文館 |

探偵文庫第十一集
少年文學第十九編
俠黑兒附錄
北海道每日新聞
幼年雜誌第四卷十六號

| | | | |
|---|---|---|---|
| 九月 | 大和心 | 幼年雜誌第四卷十七號 | 博文館 |
| 仝 | 大和心 | 幼年雜誌第四卷十八號 | 博文館 |
| 十月 | 豫備兵 | 讀賣新聞 | 日就社 |
| 仝 | 大和心 | 幼年雜誌第四卷十九號 | 博文館 |
| 仝 | 大和心 | 幼年雜誌第四卷廿號 | 博文館 |
| 十一月 | 海戰の餘波 附 警論談 | 幼年玉手箱第十一編 | 博文館 |
| 仝 | 大和心 | 幼年雜誌第四卷廿一號 | 博文館 |
| 仝 | 大和心 | 幼年雜誌第四卷廿二號 | 博文館 |





| | | | |
|---|---|---|---|
| 仝 | 義血俠血 | 讀賣新聞 | 日就社 |
| 十二月 | 大和心 | 幼年雜誌第四卷廿三號 | 博文館 |
| 仝 | 黑壁 | 詞海第三輯九卷 | 成珠社 |
| 仝 | 鬼の角 | 幼年玉手箱第十二編 パノラマ附錄畠芋之助 | 博文館 |
| 不明 | 亂菊 女刺客 | 近江新報 | 近江新報社 |
| 不明 | 秘妾傳 明治二十八年 | 近江新報 | 近江新報社 |
| 一月 | 取舵 | 大陽第一卷一號 | 博文館 |
| 仝 | 聾の一心 | 春夏秋冬第四編 冬の卷餅むしろ | 博文館 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 三月 | 神樂坂七不思議 | 文藝倶樂部第一卷三號 狐狗狸庵 | 博文館 |
| 仝 | 妖怪年代記 | 文藝倶樂部第一卷三號 畠芋之助 | 博文館 |
| 四月 | 妖怪年代記 | 文藝倶樂部第一卷四號 畠芋之助 | 博文館 |
| 仝 | 夜行巡査 | 文藝倶樂部第一卷四號 | 博文館 |
| 仝 | 一人坊主 旅僧 | 少年世界第一卷七號 白水樓主人 | 博文館 |
| 五月 | 一人坊主 | 少年世界第一卷八號 | 博文館 |
| 仝 | 妖怪年代記 | 文藝倶樂部第一卷五號 畠芋之助 | 博文館 |
| 仝 | 和洋禮式 | 日用百科全書第一編 | 博文館 |



| | | | |
|---|---|---|---|
| 仝 | 愛と婚姻 | 太陽第一卷五號 | 博文館 |
| 六月 | 妖怪年代記 | 文藝倶樂部第一卷六號 畠芋之助 | 博文館 |
| 仝 | 外科室 | 文藝倶樂部第一卷六號 | 博文館 |
| 七月 | なにがし 義血俠血 | 合卷 | 春陽堂 |
| 仝 | 妙の宮 | 北國新聞 | 北國新聞社 |
| 仝 | 鐘聲夜半錄 | 四の緒 | 春陽堂 |
| 仝 | 貧民倶樂部 | 北海道每日新聞 | 北海道每日新聞社 |
| 仝 | 女刺客 亂菊 | 北陸新聞 | 北陸新聞社 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 八月 | 八萬六千四百回 | 少年世界第一卷十五號 白水樓主人 | 博文館 |
| 仝 | 八萬六千四百回 | 少年世界第一卷十六號 | 博文館 |
| 不明 | ねむり看守 | 世界の日本 | 開拓社 |
| 不明 | 黑猫 | 北國新聞 | 北國新聞社 |
| 一月 | 明治二十九年 海城發電 | 太陽第二卷一號 | 博文館 |
| 仝 | 琵琶傳 | 國民の友第二百七十七號 | 民友社 |
| 仝 | 御殿坂下御笑草 | 文藝倶樂部第二卷一號 畠芋之助 | 博文館 |
| 二月 | 化銀杏 | 文藝倶樂部第二卷二號 青年小說 | 博文館 |





| | | | |
|---|---|---|---|
| 仝 | 取舵 | 太陽小說第一編 | 博文館 |
| 三月 | 蝙蝠物語 湯女の魂の一節 | 新文壇 | 新文壇社 |
| 四月 | 秘妾傳 | 文藝倶樂部第二卷五號 畠芋之助 | 博文館 |
| 五月 | 一之卷 | 文藝倶樂部第二卷六號 | 博文館 |
| 六月 | 二之卷 | 文藝倶樂部第二卷七號 | 博文館 |
| 七月 | 蓑谷 | 少年世界第二卷十三號 | 博文館 |
| 仝 | 五の君 | 每日新聞 | 每日新聞社 |
| 仝 | 妙の宮 | 文藝倶樂部第二卷九號 海濱義捐小說 | 博文館 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 八月 | 三之卷 | 文藝倶樂部第二卷十號 | 博文館 |
| 仝 | 百物語 | 文藝倶樂部第二卷十號 畠芋之助 | 博文館 |
| 九月 | 片山里 野社 毬果 | 大倭心第一卷一號 | 女敎社 |
| 仝 | 四之卷 | 文藝倶樂部第二卷十一號 | 博文館 |
| 仝 | 冠彌左衛門 | 單行 | 朗月堂 |
| 十月 | 五之卷 | 文藝倶樂部第二卷十二號 | 博文館 |
| 仝 | 照葉狂言 | 讀賣新聞 | 日就社 |
| 十一月 | 龍潭譚 | 文藝倶樂部第二卷十三號 小說六佳選 | 博文館 |





| | | | |
|---|---|---|---|
| 仝 | 勝手口 | 太陽第二卷二十三號 | 博文館 |
| 十二月 | 勝手口 | 太陽第二卷二十四號 | 博文館 |
| 仝 | 六之卷 | 文藝倶樂部第二卷十四號 | 博文館 |
| 仝 | ねむり看守 | はじ句 | 春陽堂 |
| 仝 | X蟷螂鰒鐵道 | 江湖文學第二號 | 江湖文學社 |
| 一月 | 明治三十年 誓之卷 | 文藝倶樂部第三卷一號 | 博文館 |
| 仝 | 戀愛詩人 | 太陽第三卷二號 | 博文館 |
| 仝 | X蟷螂鰒鐵道 | 江湖文學第三號 | 江湖文學社 |

| | | |
|---|---|---|
| 三月 | ありのまゝ | 文藝倶樂部第三卷四號 博文館 |
| 仝 | X蟷螂鰒鐵道 | 江湖文學第五號 江湖文學社 |
| 四月 | 化鳥 | 新著月刊第一卷一號 東華堂 |
| 五月 | 凱旋祭 | 新小說第二年六卷 春陽堂 |
| 仝 | 堅パン | 文藝倶樂部第三卷七號 博文館 |
| 仝 | さゝ蟹 | 國民の友第三百四十六號 民友社 |
| 六月 | 風流蝶花形 | 文藝倶樂部第三卷八號 博文館 |
| 仝 | さゝ蟹 | 國民の友第三百四十八號 民友社 |





| | | |
|---|---|---|
| 七月 | 清心庵 | 新著月刊第一卷四號 東華堂 |
| 仝 | 鐵槌の音 | 少年世界第三卷十三號 東西二十家小話 博文館 |
| 仝 | さゝ蟹 | 國民の友第三百五十號 民友社 |
| 八月 | 怪語 | 太陽第三卷十四號 博文館 |
| 仝 | 迷兒 | 少年世界第三卷十六號 博文館 |
| 仝 | 雜句帖 江戸兒、新墓、魂祭、向の女房、月番閉口の記、嬌羞、說林、坐右の美姬、畵の如し、字の如し、 | 文藝倶樂部第三卷十一號 博文館 |
| 九月 | おぼえ帳 | 新作文庫第一卷四號 青木嵩山堂 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 仝 | 赤インキ物語 | 太陽第三卷十八號 | 博文館 |
| 十月 | 雜句帖<br>「さうですか」、珍重左衞門、露八の物眞似、自然不自然、名題、淺黃裏、 | 文藝倶樂部第三卷十四號 | 博文館 |
| 仝 | 十萬石 | 小國民第九卷二十一號<br>少年夜話 | 北隆館 |
| 仝 | 雜句帖<br>百物語、針の山、作者の男ぶり、近山あさり、鐵毒出作的媼、藤 附堂竹の浪ふられ行燈、竹屋の渡、（吾妻名所）添寢、 | 文藝倶樂部第三卷十五號 | 博文館 |
| 仝 | 七本櫻 | 新著月刊第一卷九號 | 東華堂 |
| 十二月 | 髯題目 | 文藝倶樂部第三卷十六號 | 博文館 |





| | | | |
|---|---|---|---|
| 仝 | 山中哲學 | 太陽第三卷二十四號 | 博文館 |
| 仝 | 暗まぎれ | 國民の友第三百六十四號 | 民友社 |
| 仝 | 慈善會<br>貧民倶樂部の一節 | 新著月刊第一卷十號 | 東華堂 |
| 一月 | 明治三十一年<br>玄武朱雀 | | |
| 二月 | 辰己巷談 | 反省雜誌號不明 | 反省社 |
| 仝 | 赤インキ物語<br>山の怪 | 新小說第三年二卷 | 春陽堂 |
| | | 太陽第四卷三號 | 博文館 |
| 三月 | 蛇くひ | 新著月刊第二卷三號 | 東華堂 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 仝 八 | 飛花落葉 | 青山葉山、棟の女、並木の松、黄昏、鯛、おさなあそび | 太陽第四卷五號 | 博文館 |
| 仝 | 飛花落葉 | 野宿、三樣の不氣味、馬車から手、十錢の價、一錢の價、 | 太陽第四卷五號 | 博文館 |
| 四月 | 白牛 | 山僧 | 國民の友第三百六十八號 | 民友社 |
| 仝 | 笈摺草紙 | | 文藝倶樂部第四卷五號 | 博文館 |
| 仝 | 飛花落葉 | 分瓣梅花、童謠、御苦勞でした、一双の明眸、立ン坊、 | 太陽第四卷七號 | 博文館 |





| | | | |
|---|---|---|---|
| 五月 | 黒百合 | 讀賣新聞 | 日就社 |
| 八月 | みだれ橋 | 星あかり | 太陽第四卷十七號 | 博文館 |
| 九月 | 鶯花徑 | | 太陽第四卷十九號 | 博文館 |
| 仝 | 鶯花徑 | | 太陽第四卷二十號 | 博文館 |
| 仝 | 通夜物語 | | 大阪毎日新聞 | 大阪毎日新聞社 |
| 十一月 | 梟物語 | | 文藝倶樂部第四卷十四號 | 博文館 |
| 十二月 | 五本松 | 明治三十二年 | 太陽第四卷二十四號 | 博文館 |
| 一月 | 繪日傘 | | ふところ子 | 春陽堂 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 仝 | 雪の山家 立春 | 讀賣新聞 | 日就社 |
| 仝 | 三尺角 | 新小說第四年一卷 | 春陽堂 |
| 二月 | 錦帶記 | 單行 | 春陽堂 |
| 仝 | さら〳〵越 | 少年世界第五卷五號 | 博文館 |
| 二月 | 雜句帖 密柑、鯖寶、發句、方言、童謠、俳食、新婚、 | 太陽第五卷三號 | 博文館 |
| 三月 | さら〳〵越 | 少年世界第五卷七號 | 博文館 |
| 四月 | 湖のほとり | 新小說第[illegible]年五號 | 春陽堂 |





| | | | |
|---|---|---|---|
| 五月 | 丸雪小雪 風流翁、言語、のろけ箱、 | 文藝倶樂部第五卷七號 | 博文館 |
| 六月 | 草水晶 卷のはじめ、氷寶、かくれ家、妙の宮、 | 花ふぶき | 新聲社 |
| 七月 | 丸雪小雪 瀧車、燒豆腐、夜の網、無題、 | 文藝倶樂部第五卷九號 | 博文館 |
| 八月 | 吾妻名所 竹屋のわたし | 紅蓮白蓮 | 新聲社 |
| 十一月 | 湯島詣 | 單行 | 春陽堂 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 仝 | 幻往來 廊下の君、車前草 | 活文壇第一卷第一號 白水樓主人 | 大學館 |
| 仝 | 彌次行 | 太陽第五卷二十五號 | 博文館 |
| 十二月 | 第八大吉 | 文藝倶樂部第五卷十六號 | 博文館 |
| 仝 | 幻往來 明治三十三年 | 活文壇第一卷第二號 白水樓主人 | 大學館 |
| 一月 | 弓取町人 | ふた葉第三卷第一號 | 文淵堂 |
| 仝 | 名媛記 | 活文壇第一卷三號 白水樓主人 | 大學館 |
| 二月 | 怪談女の輪 | 太陽第六卷二號 | 博文館 |
| 仝 | 高野聖 | 新小說第五年三卷 | 春陽堂 |





| | | | |
|---|---|---|---|
| 三月 | 楷物語 海の鳴る時 | 太陽第六卷三號 | 博文館 |
| 仝 | 吾妻名所 | 小山水 | 矢島誠進堂 |
| 不明 | 照葉狂言廣告 | | |
| 四月 | 照葉狂言 附 五の君 | 單行 | 春陽堂 |
| 五月 | 春狐談 ばけかた、曲線、感應、眞言、 | 太陽第六卷六號 | 博文館 |
| 仝 | 湯女の魂 | 新小說第五年六卷 春螢轉 | 春陽堂 |
| 六月 | 月下園 | 夏模樣 | 三井呉服店 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 仝 | 旅僧 一人坊主 | 明星第一卷第三號 | 新詩社 |
| 仝 | 道行松の露 | 大陽第六卷九號 | 博文館 |
| 仝 | 狸囃子 | 新小說第五年八卷 | 春陽堂 |
| 七月 | うしろ髮 | 新小說第五年九卷 | 春陽堂 |
| 八月 | 長屋及傷 小劍氣 | 大陽第六卷十號 | 博文館 |
| 十月 | 女肩衣 | 帝國文學第六卷十號 | 帝國文學會 |
| 仝 | 一葉の墓 | 新小說第五年十三卷 | 春陽堂 |





| | | | |
|---|---|---|---|
| 十一月 | 葛飾砂子 | 新小說第五年十四卷 | 春陽堂 |
| 仝 | ポンチの記 裸らふそく | 大陽第六卷十三號 | 博文館 |
| 仝 | 政談十二社 | 小天地第一卷二號 | 文淵堂 |
| 不明 | 監督喇叭 | 秋風琴 | 新聲社 |
| 一月 | 明治三十四年 處方秘箋 | 反省雜誌號不明 | 反省社 |
| 仝 | 斧の舞 | 明星年十號 | 新詩社 |
| 仝 | 政談十二社 | 小天地第一卷四號 | 文淵堂 |
| 仝 | いろ扱ひ | 新小說第六年一卷 | 春陽堂 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 仝 | 本朝食人種 | 今世小年第二卷一號 甲鐵艦 | 春陽堂 |
| 仝 | 炭の鋸 | 少年世界第七卷二號 春遊び | 博文館 |
| 仝 | 風流後妻打 そら解 | 九州日々新聞 | 九州日々新聞社 |
| 三月 | 水雞の里 | 新小說第六年三卷 | 春陽堂 |
| 仝 | 赤蛙 かくれ家、毬栗、 | 女學世界二卷四號 靈すみれ | 博文館 |
| 不明 | 通夜物語廣告 | | |
| 四月 | 通夜物語 | 單行 | 春陽堂 |





| | | | |
|---|---|---|---|
| 仝 | 註文帳 | 新小說第六年四卷 | 春陽堂 |
| 六月 | 部屋の弟 蝉を惜む記 | 文藝界第一卷一號 | 大日本女學會 |
| 一月 | | | |
| 仝 | 木精—三尺角拾遺 | 小天地第一卷八號 | 文淵堂 |
| 仝 | 月下園 | あだ浪 | 文祿堂 |
| 八月 | 森の紫陽花 | 新小說第六年八卷 | 春陽堂 |
| 十一月 | 神屏風 | 新小說第六年十一卷 | 春陽堂 |
| 十二月 | 立春 雪の山家 | 短編奇談勢揃ひ | 晴光館 |

明治三十五年

| | | | |
|---|---|---|---|
| 一月 | 女仙前記 | 新小説第七年一卷 | 春陽堂 |
| 仝 | 熱海の春 | 俳藪寅の一 | 俳藪發行所 |
| 仝 | 妖僧記 | 九州日々新聞 | 九州日々新聞社 |
| 仝 | 祝盃 | 鹿兒島新聞 | 鹿兒島新聞社 |
| 不明 | 三枚續廣告 | | |
| 一月 | 三枚續 | 單行 | 春陽堂 |
| 仝 | 瀧の白糸について | 歌舞伎第二十號 | 歌舞伎發行所 |
| 三月 | 城の石垣 | 新小説第七年二號 | 春陽堂 |





| | | | |
|---|---|---|---|
| 仝 | 波がしら | 文藝界第一卷一號 | 金港堂 |
| 不明 | 黒百合廣告 | | |
| 三月 | 黒百合 | 單行 | 春陽堂 |
| 四月 | 名古屋見物 | 新小説第七年四卷 | 春陽堂 |
| 五月 | 名古屋見物 | 新小説第七年五卷 | 春陽堂 |
| 仝 | きぬ〻川 | 新小説第七年五卷 | 春陽堂 |
| 仝 | 青切符 | 俳藪寅の五 | 俳藪發行所 |
| 六月 | 「めぐる泡」序 | 新小説第七年六卷 | 春陽堂 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 八月 | やどり木 | 太陽第八卷十號 | 博文館 |
| 九月 | 花菖蒲 御留守さま | 花かすみ | 文錦堂 |
| 仝 | 三重の襖 不思議、女の輪 | 花かすみ | 文錦堂 |
| 仝 | 手帳四五枚 | 新小說第七年九卷 | 春陽堂 |
| 仝 | 逗子だより | 文藝寅の八 | 藻社 |
| 仝 | 海浴雜記 | 文藝寅の八 | 藻社 |
| 十月 | 親子そば三人客 | 文藝界第一卷九號 | 金港堂 |





| | | | |
|---|---|---|---|
| 仝 | 繪はがき | 文藝寅の九 | 藻社 |
| 十一月 | 起誓文 | 新小說第七年十一卷 | 春陽堂 |
| 仝 | 柳のお柳について | 文藝寅の十 | 藻社 |
| 仝 | 書齋の花 | 不明 | 不明 |
| 不明 | 山の手小景 | 文藝 | 藻社 |
| 一月 | 明治三十六年 ふた所 田每かゞみ 山僧（白牛）、暗まぎれ、星あかり（亂れ橋）、曉方 泌筆、蠅を憎む記（部屋の弟）、名媛記、斧の舞、みちゆき松の露、蓑谷、玄武朱雀、祝盃、一葉の墓、さゝ蟹、 | 合卷 | 春陽堂 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 不明 | 田毎かゞみ廣告 | | |
| 一月 | 二世の契 | 新小說第八年一卷 | 春陽堂 |
| 仝 | 千歲の鉢 | 文藝卯ノ一 | 藻社 |
| 二月 | 吉浦蜆 | 新小說第八年二卷 | 春陽堂 |
| 仝 | 「聖人乎盜賊乎」序 | 文藝卯ノ二 | 藻社 |
| 三月 | 茶一碗 | 文藝倶樂部第九卷四號 | 博文館 |
| | 篝炬燵 | | |
| 四月 | 舞の袖 | 新小說第八年四卷 | 春陽堂 |
| 五月 | 伊勢の卷 | 新小說第八年六卷 夏木立 | 春陽堂 |





| | | | |
|---|---|---|---|
| 仝 | 藥草取 | 二六新聞 | 二六新聞社 |
| 仝 | 俠言 | 文藝倶樂部第九卷七號 | 博文館 |
| 七月 | 草あやめ | 新小說第八年八卷 | 春陽堂 |
| 九月 | 鷺の灯 | 太陽第九卷十號 | 博文館 |
| 十一月 | 藥草取 | 換果篇 | 博文館 |
| 仝 | 風流線 | 國民新聞 | 民友社 |
| 仝 | 白羽箭 | 文藝倶樂部第九卷十五號 | 博文館 |
| 仝 | 白屈菜の記 | 新小說第八年十二卷 | 春陽堂 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 仝 | 紅葉先生 | 明星卯歳十一號 | 新詩社 |
| 十二月 | 紅葉先生逝去前十五分 | 新小說第八年十三卷 | 春陽堂 |
| 一月 | 友白髮（明治三十七年） | 文藝倶樂部第十卷一號 | 博文館 |
| 三月 | 留守宅見舞 | 日露戰誌第一卷一號 | 錦文堂 |
| 仝 | 滿州道成寺 | 日露戰誌第一卷二號 | 錦文堂 |
| 仝 | 紅雪錄 | 新小說第九年三卷 | 春陽堂 |
| 四月 | 續紅雪錄 | 新小說第九年四卷 | 春陽堂 |
| 五月 | 千鳥川（新名所） | 時好辰の五號 | 三井吳服店 |





| | | | |
|---|---|---|---|
| 六月 | 續風流線 | 國民新聞 | 民友社 |
| 七月 | 外國軍事通信員 | 文藝倶樂部第十卷十號 勝いくさ | 博文館 |
| 仝 | 左の窓 | 新小說第九年七卷 | 春陽堂 |
| 八月 | 留守見舞 | 三尺劍 | 國民書院 |
| 九月 | 紅葉山人「寢姿百形」附記 | 新小說第九年九卷 | 春陽堂 |
| 仝 | 柳小島 | 文藝倶樂部第十卷十二號 | 博文館 |
| 十月 | 深沙大王 | 藝倶樂部第十卷十三號 | 博文館 |
| 仝 | 隅田の橋姫 | 時代思潮第一卷九號 | 時代思潮社 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 不明 | 風流線廣告 | 單行 | 春陽堂 |
| 十二月 | 風流線 明治三十八年 | 新小說第十年一卷 | 春陽堂 |
| 一月 | 若紫 | 新小說第十年一卷 | 春陽堂 |
| 仝 | おもて二階 | 女學世界第五卷二號 小天地 | 博文館 |
| 仝 | 雪の翼 | 秋田魁新報 | 秋田魁新報社 |
| 仝 | 小劔氣 長屋刄傷 | | |
| 三月 | かながき水滸傳 | 新小說第十年三卷 | 春陽堂 |
| 四月 | 銀短冊 | 文藝倶樂部第十一卷五號 | 博文館 |





| | | | |
|---|---|---|---|
| 五月 | 日記の端 | 天鼓第一卷四號 | 北上屋書店 |
| 六月 | 瓔珞品 | 新小說第十年六卷 | 春陽堂 |
| 七月 | 小鼓吹 | 新小說第十年七卷 | 春陽堂 |
| 仝 | 少年行 | 太陽第十一卷十號 | 博文館 |
| 仝 | 道中一枚繪 一枚日記 | ハガキ文學第二卷十 | 日本葉書會 |
| 不明 | 續風流線廣告 | | |
| 八月 | 續風流線 | 單行 | 春陽堂 |
| 仝 | 手紙 | 新評論第一卷一號 | 同好會 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 十月 | 北國空 | 軍事畫報第二卷十一號 | 富山房 |
| 仝 | 胡蝶之曲 | 新小說第十年十卷 | 春陽堂 |
| 不明 | 伊勢の卷廣告 | | |
| 仝 | 伊勢の卷 | 單行 | 春陽堂 |
| 十一月 | 女客 | 中央公論第二十年十一號 | 反省社 |
| 十二月 | 惡獸篇 | 文藝倶樂部第十一卷十六號 | 博文館 |
| 仝 | 仲の町にて紅葉祭の事 明治三十九年 | 新小說第十年十二卷 | 春陽堂 |
| 一月 | 海異記 | 新小說第十一卷 | 春陽堂 |





| | | | |
|---|---|---|---|
| 仝 | 式部小路 三枚つゞき(續編) | 大阪朝日新聞 | 大阪朝日新聞社 |
| 仝 | 月夜遊女 | 太陽第十二卷一號 | 博文館 |
| 仝 | 毬栗 赤蛙 隱家 | 秋田魁新報 | 秋田魁新報社 |
| 不明 | 誓の卷廣告 | | |
| 仝 | 誓の卷 附 清心庵 | 單行 | 有倫堂 |
| 二月 | 術三則 | 新小說第十一年三卷 | 春陽堂 |
| 五月 | 鳴濤館より | 手紙雜誌第三卷五號 | 有樂社 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 六月 | 七本櫻 | 單行 | 有倫堂 |
| 仝 | 無憂樹 | 單行 | 有倫堂 |
| 七月 | お辨當三人前 | 文藝倶樂部第十二卷十號 | 博文館 |
| 仝 | かな自在 | 新小說第十一年七卷 | 春陽堂 |
| 八月 | 逗子より | 新小說第十一年八卷 | 春陽堂 |
| 仝 | 眞情吐露に限る | 文章世界第一卷六號 日記と手紙と | 博文館 |
| 十一月 | そら解 風流後要打 | 太陽第十二卷十四號 | 博文館 |
| 仝 | 春晝 | 新小說第十一年十一卷 | 春陽堂 |





| | | | |
|---|---|---|---|
| 十二月 | 春晝後刻 | 新小說第十三年十二卷 | 春陽堂 |
| 仝 | 女優力技評 | 歌舞伎第八十號 | 歌舞伎發行所 |
| 仝 | 愛火 | 單行 | 春陽堂 |
| 一月 | 明治四十年 婦系圖 | 大和新聞 | 大和新聞社 |
| 仝 | 式部小路 | 單行 | 隆文館 |
| 仝 | 神樂坂 山の手小景前中 | 青年第一卷一號 | 青年社 |
| 仝 | 靈象 松風 | 文藝倶樂第十三卷一號 | 博文館 |
| 仝 | 緣結び | 新小說第十二年一卷 | 春陽堂 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 一月 | 扱帶 妙の宮 | 秋田魁新聞 | 秋田魁新聞社 |
| 仝 | 車前草 幻往來後半 | 東亞新報 | 東亞新報社 |
| 二月 | 聞きたるまゝ | 新小說第十二年二卷 | 春陽堂 |
| 三月 | 千代の鉢 千歲の鉢 | 女鑑第十七年三號 | 國光社 |
| 仝 | 知つたふり | 新小說第十二第三卷 | 春陽堂 |
| 四月 | 知つたふり | 新小說第十二年四卷 | 春陽堂 |
| 五月 | お化ずきの由來と處女作 | 新潮第六卷五號 | 新潮社 |
| 仝 | 沈鐘 | 大和新聞 | 大和新聞社 |





| | | | |
|---|---|---|---|
| 仝 | 「新選怪談集」序 | 新選怪談集 | すみ屋書店 |
| 六月 | 廊下の君 幻往來前半 | 文藝倶樂部第十三卷九號 ふた昔 | 博文館 |
| 七月 | あひ〳〵傘 | 新小說第十二年七卷 | 春陽堂 |
| 九月 | 曙山さん | 新小說第十二年九卷 | 春陽堂 |
| 十一月 | かしこき女 明治四十一年 | 新小說第十二年十一卷 | 春陽堂 |
| 一月 | 草迷宮 | 單行 | 春陽堂 |
| 仝 | 雌蝶 | 新小說第十三年一卷 | 春陽堂 |
| 二月 | 高野聖 附 政談十二社 | 單行 | 左久良書房 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 仝 | 謹寫 | 新小說第十三年二卷<br>紅葉丸生遺文 | 春陽堂 |
| 不明 | 婦系圖廣告 | 單行 | 春陽堂 |
| 仝 | 婦系圖前編 | 早稻田文學第一千八號 | 東京堂 |
| 三月 | たそがれの味 | 文藝倶樂部第十四卷五號 | 博文館 |
| 四月 | 頰白 | 新小說第十三年四卷 | 春陽堂 |
| 仝 | 花間文字 | 新潮第八卷四號 | 新潮社 |
| 仝 | ロマンチックと自然主義 | 新小說第十三年五卷 | 春陽堂 |
| 五月 | 妙齡 | | |





| | | | |
|---|---|---|---|
| 六月 | 沼夫人 | 新小說第十三年六卷 | 春陽堂 |
| 仝 | 婦系圖後編 | 單行 | 春陽堂 |
| 仝 | その頃 | 新聲第十八卷七號 | 隆文館 |
| 七月 | 予の態度 | 新聲第十九卷一號 | 隆文館 |
| 仝 | 四國だより | 新小說第十三年七卷<br>淺井房次の手紙 | 春陽堂 |
| 九月 | 沈鐘 | 單行 | 春陽堂 |
| 十月 | 蘆の葉釣 | 新小說第十三年十卷 | 春陽堂 |
| 十一月 | 雅號の由來 | 中學世界第十一卷十五號 | 博文館 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 仝 | 新富座所見 | 新小説號十三年十一卷 | 博文館 |
| 十二月 | 星女郎 | 文藝倶樂部第十四卷十五號 | 博文館 |
| 仝 | むかふまかせ | 文章世界第三卷十六號 | 博文館 |
| 一月 | 明治四十二年 七艸 | 新小説第十四年一卷 | 春陽堂 |
| 仝 | 蔦太郎 | サンデー第六號 | 東京社 |
| 仝 | 小説に用ふる天然 | 國民新聞 | 民友社 |
| 仝 | 會話、地の文 | 國民新聞 | 民友社 |
| 二月 | 柳小島 | むら雲 | 有倫堂 |





| | | | |
|---|---|---|---|
| 仝 | 尼ヶ紅 | 新小説第十四年二卷 | 春陽堂 |
| 三月 | 座談より | 東京毎日新聞 | 東京毎日新聞社 |
| 仝 | 談話 | 東京毎日新聞 | 東京毎日新聞社 |
| 四月 | 尼ヶ紅續編 | 新小説第十四年四卷 | 春陽堂 |
| 仝 | 紫手綱 | 文藝倶樂部第十五卷五號 | 博文館 |
| 仝 | 怪異と表現法 | 東京日日新聞 | 東京日日新聞社 |
| 仝 | 小説の地の文の語尾 | 國民新聞 | 民友社 |
| 仝 | 三越趣味に就て | 太陽第十五卷五號 | 博文館 |

| | | |
|---|---|---|
| 仝 | 舊作の回顧 | 新潮第十卷四號 | 新潮社 |
| 仝 | 歩くことばかり思つて歩く | 文章世界第四卷五號 | 博文館 |
| 仝 | 柳宮<br>妖怪年代記、女客、置炬燵（茶一碗）お留守さま、（花菖蒲）木精（三尺角拾遺 X蟷螂）飯鐵道、化島、旅僧（一人坊主）藪子三そば人客、幻往來、立春、女眉衣、妖僧記（黑壁）紫陽花（炭の跡）毬栗（赤蛙、陰家）五本松、青切符、千歲の鉢（鶴の姿）裸らふそく（ポンチの記）山の手小景、長屋刄傷、（小劍氣）妙の宮（扱帶） | 合卷 | 春陽堂 |
| 五月 | 貸家一覽 | 太陽第十五卷六號 | 博文館 |





| | | |
|---|---|---|
| 仝 | 藝術は余が最良の仕事也 | 文章世界第四卷七號<br>予は藝術を如何に綴ずるか | 博文館 |
| 仝 | 文章の音律 | 明治評論第十二卷五號 | 明治評論社 |
| 仝 | 春宵讀本<br>狸囃子、蹴次行、知つたふり、小鼓吹、森の紫陽花、逗子だより、術三則、聞きたるまゝ、柳のお柳について、伊勢の卷の序、聖人乎盜賊乎、吾妻名所、城の石垣、北國雪、赤インキ物語、吉浦蜆、白屈菜の記、紅葉先生逝去前十五分間、仲の町にて紅葉祭の事、かしこき女、曲線、感應、眞言、かながき水滸傳、草あやめ、雜談帖（青山、葉山、棟の女、並木の松、たそがれ、獺、をさなあそび、野宿、三樣の不氣味、馬車から | 合卷 | 文泉堂 |

手、十錢の價、一錢の價、分辨梅花、童謠、御苦勞でした、一双の明眸、立ン坊、月番閉口の記、密柑、鯖賣、童謠、俳食、戀愛詩人、逗子より、妙齡、かな自在、

| | | | |
|---|---|---|---|
| 六月 | 文藝は感情の産物也 | 新潮第十卷八號創作に於ける智識と感情 | 新潮社 |
| 仝 | 一度は恁うした娘の時代 | 新聲第二十卷五號 | 新聲社 |
| 仝 | 何が故に文藝革新會に入りしか | 黑白 | 黑白社 |
| 仝 | 怪力 | 新小說第十四年六卷 | 春陽堂 |
| 七月 | 怪力 | 新小說第十四年七卷 | 春陽堂 |
| 仝 | 海の使者 | 文章世界第四卷九號 | 博文館 |





| | | | |
|---|---|---|---|
| 仝 | 事實の根底、想像の潤色 | 新潮第十一卷一號事實と想像 | 新潮社 |
| 仝 | 描寫の眞僞 | 秀才文壇第九卷十四號 | 文光堂 |
| 八月 | 夏の夕 | 中學世界第十二卷十號 | 博文館 |
| 仝 | 文士と八月 | 國民新聞 | 民友社 |
| 九月 | 吉祥果 | 少女第一卷一號 | 女子文壇社 |
| 仝 | 紅葉先生の玄關番 | 文章世界第四卷十二號 | 博文館 |
| 仝 | みたしなみの好い婦人と惡い婦人 | 婦人畫報第三十一號 | 東京社 |
| 仝 | 犯罪と小說 | 明治評論第十二卷九號 | 明治評論社 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 仝 | 神鑿 | 單行 | 文泉堂 |
| 仝 | 「諸國童謠大全」序 | 諸國童謠大全 | 春陽堂 |
| 仝 | 「お伽花束」序 | お伽花束 | 宇野氏編 |
| 仝 | 鏡花小品<br>道中一枚繪、神樂坂七不思議、繪はがき（一枚日記）怪談女の論、俠言、海の鳴る時（椙物語）友白髪、見舞の文（留守見舞）千鳥川（新名所）さら〳〵越、蛇くひ、雪の翼、波かしら、 | 小品叢書第五卷 | 隆文館 |
| 十月 | 喜多八のために | 新小說第十四年十卷 | 春陽堂 |
| 仝 | 事實と着想 | 新潮第十一卷四號 | 新潮社 |





| | | | |
|---|---|---|---|
| 仝 | 昨日午前の日記 | 國民新聞 | 民友社 |
| 仝 | 「怪談會」序 | 怪談會 | 柏舍書樓 |
| 仝 | 一寸怪 | 怪談會 | 柏舍書樓 |
| 仝 | 「白鷺」豫告 | 朝日新聞 | 朝日新聞社 |
| 仝 | 白鷺 | 朝日新聞 | 朝日新聞社 |
| 仝 | 雁われの秋茄子は所帶持の珍味 | 手紙雜誌第八卷十號 | 手紙雜誌社 |
| 十二月 | 錢湯 | 新小說第十四年十二卷 | 春陽堂 |
| 仝 | 滑稽趣味 | 時事新報 | 時事新報社 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 仝 | 舊文學と怪談 | 時事新報 | 時事新報社 |
| 仝 | 今の女も時代的 | 中央新聞 文士の女性觀 | 中央新聞社 |
| 一月 | 明治四十三年 歌行燈 | 新小說第十五年一卷 | 春陽堂 |
| 仝 | 國貞ゑがく | 太陽第十六卷一號 | 博文館 |
| 仝 | 松の葉 | 女子文壇第六年一號 | 女子文壇社 |
| 仝 | 女の保護色 | 新潮第十二卷一號 美人の印象 | 新潮社 |
| 仝 | 京都の印象 | 時事新報 | 時事新報社 |
| 仝 | 鏡花集第一卷 | 合卷 | 春陽堂 |

鐵淵兵、義血俠血、三尺角、三尺角拾遺、辰巳巷





| | | | |
|---|---|---|---|
| | 談、凱旋祭、れむり看守、湖のほとり、水鶏の里、葛飾砂子、紬屑風、うしろ髮、湯女の魂、二世の契、繪日傘、伊勢の卷、 | | |
| 二月 | 初めて紅葉先生に見えし時 | 新小說第十五年二卷 | 春陽堂 |
| 仝 | 白鷺 | 單行 | 春陽堂 |
| 仝 | 十月の日記より | 新聞名不明 | 不明 |
| 三月 | 月夜車 | 毎日電報 | 毎日電報社 |
| 仝 | 千鳥樣 | 新小說第十五年三卷 | 春陽堂 |
| 仝 | 平面描寫に就きて | 新潮第十二卷三號 | 新潮社 |
| 仝 | 文藝と東京 | 時事新報 | 時事新報社 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 四月 | 楊柳歌 | 新小說第十五年四卷 | 春陽堂 |
| 仝 | お花見雜感 | 時事新報 | 時事新報社 |
| 五月 | かきぬき<br>白鷺の芝居二三節 | 新小說第十五年五卷 | 春陽堂 |
| 仝 | 鏡花集第二卷<br>高野聖、若紫、瓔珞品、注文帳、誓の卷、胡蝶の曲、清心庵、紅雪錄、 | 合卷 | 春陽堂 |
| 仝 | わんぱく物語 | やまと新聞 | やまと新聞社 |
| 六月 | 續楊柳歌 | 新小說第十五年六卷 | 春陽堂 |
| 七月 | 文章上達の順序 | 新潮第十三卷一號 | 新潮社 |





| | | | |
|---|---|---|---|
| 八月 | 「デモ」書集序 | デモ書集 | 如山堂 |
| 仝 | 鏡花集第三卷<br>緣結び、沼夫人、海異記、七本櫻、尼ケ紅、雌蝶、七草、女仙前記、きぬ〻川、春晝、春寢後刻、 | 合卷 | 春陽堂 |
| 九月 | 遠野の奇聞 | 新小說第十五年九卷 | 春陽堂 |
| 十月 | 三味線堀 | 三田文學第一卷六號 | 三田文學會 |
| 仝 | 色暦 | 新小說第十五年十卷 | 春陽堂 |
| 十一月 | 遠野の奇聞 | 新小說第十五年十一卷 | 春陽堂 |
| 仝 | 櫛卷 | 太陽第十六卷十四號 | 博文館 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 仝 | 作物の用意 | 毎日電報 | 毎日電報社 |
| 十二月 | 畫の裡 | 學生文藝第一卷五號 | 聚精堂 |
| 仝 | 麥搗 | 文藝倶樂部第十六第十六號 | 博文館 |
| 一月 | 朱日記 明治四十四年 | 三田文學第二卷一號 | 三田文學會 |
| 仝 | 小春 | 學生文藝第二卷一號 | 聚精堂 |
| 仝 | 雪茶屋 山中哲學の一節 | 臺灣愛國婦人第二十六卷 | 愛國婦人會臺灣支部 |
| 仝 | 青鷺 | 毎日電報 | 毎日電報社 |
| 仝 | 一銚子 | 大阪毎日新聞 | 大阪毎日新聞社 |





| | | | |
|---|---|---|---|
| 仝 | 酸漿 | 萬朝報 | 朝報社 |
| 二月 | 露肆 | 中央公論第二十六年第一號 | 中央公論社 |
| 仝 | 築地兩國 | 萬朝報 | 朝報社 |
| 三月 | 吉原新話 | 新小說第十六年三卷 | 春陽堂 |
| 仝 | 鑑定 | 學生文藝第二卷三號 | 聚精堂 |
| 仝 | 鏡花叢書 外科室、海城發電、化銀杏、慈善會、勝手口、鶯花徑、梟物語、外國軍事通信員、やどり木、月夜遊女、少年行、深沙大王、靈象、蛭白、鷺の灯、そら解、星女郎、紫手綱、 | 合卷 | 博文館 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 四月 | 草双紙に現はれたる江戸の女の性格 | 新小説第十六年四卷 | 春陽堂 |
| 五月 | 妖術 | 太陽第十七卷六號 | 博文館 |
| 仝 | 人參 | 文藝倶樂部第十七卷七號 | 博文館 |
| 六月 | 逢ふ夜 | 國民新聞 | 民友社 |
| 仝 | 丸て形なしと御承知ありたし | 國民新聞娯問題 | 民友社 |
| 仝 | 高棧敷 | 新日本第一卷三號 | 富山房 |
| 仝 | 池の聲 | 太陽第十七卷八號 | 博文館 |
| 仝 | 一景話題 夫人堂、あんころ餅、夏の水、甲冑堂、 | 新小説第十六年六卷 | 春陽堂 |





| | | | |
|---|---|---|---|
| 七月 | 笹色紅 祇園物語 | 文學倶樂部第十七卷九號 | 博文館 |
| 仝 | 江戸の女 | 新彩七月號 | 新彩社 |
| 仝 | 萬斛の涼味 | 時事新報 | 時事新報社 |
| 八月 | 森の中 | 太陽第十七卷十號 | 博文館 |
| 仝 | 杜若 | 新小説第十六年八卷 | 春陽堂 |
| 仝 | 月夜 | 婦女界第四卷二號 | 婦女界社 |
| 十月 | 貴婦人 | 三越第一卷九號 | 三越吳服店 |
| 仝 | 昔の浮世絵と今の美人畫 | 新小説第十六卷十卷 | 春陽堂 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 仝 | 豆名月 | 俳味第二卷十號 | 俳味社 |
| 仝 | 銀鈴集 笈摺草紙、龍潭譚、風流蝶花形、山中哲學、弓取町人、白羽箭、耳獸箭、 | 合卷 | 隆文館 |
| 十二月 | 爪びき | 文藝倶樂部第十七卷十六號 | 博文館 |
| 仝 | 鰻 | 新小說第十六年十二卷 | 春陽堂 |
| 一月 | 明治四十五年 南地心中 | 新小說第十七年一卷 | 春陽堂 |
| 仝 | 紫道中 | 能樂第十卷一號 | 能樂館 |
| 仝 | 片しぐれ | 日本及日本人第五百七十三號 | 政教社 |
| 仝 | 一席話 | 旅行第二卷一號 | 旅行社 |





| | | | |
|---|---|---|---|
| 仝 | 歌行燈 附 通り魔（貸家一覽） | 合卷 | 春陽堂 |
| 仝 | 二番目狂言は | 通夜物語報條 | 本鄉座 |
| 二月 | 三つのとも | 新小說第十七年二卷 酒と色と味 | 春陽堂 |
| 仝 | 女の所から手紙 | 新婦人第二年二月の卷 | 聚精堂 |
| 仝 | 稽古扇 | 中央新聞 | 中央新聞社 |
| 三月 | 內輪話 | 日本婦人 | 婦人社 |
| 仝 | 對の鼓 風流線の一節 | 能樂第十卷十三號 | 能樂社 |
| 仝 | 東京の女と大阪の女 | 新潮第十六卷三號 | 新潮社 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 四月 | 霧<br>三人の盲の話 | 中央公論第二十七年四號 | 中央公論社 |
| 仝 | 國貞ゑがく<br>國貞ゑがく、櫛卷、海の使者、露肆、小春、朱日記、逢ふ夜、奴地兩國、妖術、 | 合卷 | 春陽堂 |
| 五月 | 廓そだち | 新小說第十七年五卷 | 春陽堂 |
| 六月 | 糸遊 | 太陽第十八卷九號<br>雄飛二十五年 | 博文館 |
| 仝 | 唐模樣<br>人妖、少年僧、魅室、長夜 | 文藝倶樂部第十八卷九號<br>廿五名家選 | 博文館 |
| 七月 | 歌仙彫 | 新小說第十七年七卷 | 春陽堂 |
| 仝 | 紅提灯 | 淑女畫報第一卷四號 | 博文館 |





| | | | |
|---|---|---|---|
| 八月 | 江戸の女<br>大正元年 | 新天地第一卷一號 | 新天地社 |
| 九月 | 稽古扇 | 文藝畫報第一卷九號 | 文藝畫報社 |
| 十月 | 淺茅生 | 地球第一卷七號 | 博文館 |
| 十一月 | 印度更紗 | 中央公論第二十七年十一號 | 中央公論社 |
| 仝 | 霰ふる | 太陽第十八卷十五號 | 博文館 |
| 十二月 | 南地心中<br>南地心中、三人の盲の話(鶴)產婦、淺茅生)、紅提灯、高棧敷、印度更紗、霰ふる、 | 合卷 | 文藝書院 |
| 一月 | 大正二年<br>五大力 | 新小說第十八年一卷 | 春陽堂 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 仝 | 遊行車 | 文藝倶樂部第十九卷一號 | 博文館 |
| 三月 | 夜叉ヶ池 | 演藝倶樂部第二卷三號 | 博文館 |
| 仝 | 櫻草<br>夫人堂、あんころ餅、夏の水、甲冑堂、魅室、良夜、喜多八のために、遠野の奇聞、人參、千鳥樣、廊そだち、いろ扱ひ、左の窓、畫の裡、花間文字、鑑定、饅、怪力、麥搗、月夜車、松の葉、吉祥果、昔の浮世繪と今の美人畫、麗姫、愁粧、蘆の葉釣、手帳四五枚、錢湯、 | 合卷 | 文藝書院 |
| 四月 | 艶書 | 現代第四卷四號 | 現代社 |
| 仝 | 銀杏の下<br>公孫樹下 | 臺灣愛國婦人第五十二號 | 愛國婦人會臺灣支部 |





| | | | |
|---|---|---|---|
| 仝 | 銀杏の下<br>公孫樹下 | 雪月花第一卷三號 | 雪月花發行所 |
| 五月 | 狸囃子<br>陽炎座 | 新小說第十八年五卷 | 春陽堂 |
| 仝 | 遊行車<br>遊行車、鍍色紅 | 合卷 | 尙榮堂 |
| 六月 | 琵琶本 | ホトトギス第二百二號 | ホトトギス發行所 |
| 七月 | 紅玉 | 新小說第十八年七卷 | 春陽堂 |
| 八月 | 二挺鼓<br>參宮日記 | 京城日報 | 京城日報社 |
| 九月 | 名物の印象 | 臺灣愛國婦人第五十八號 | 愛國婦人會臺灣支部 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 十月 | 乘合船<br>（毎題目、艶書、貴婦人、糸遊、葛藤本、爪びき、） | 合卷 | 春陽堂 |
| 十二月 | 海神別莊 | 中央公論第二十八年十四號 | 中央公論社 |
| 仝 | 戀女房<br>附　稽古扇 | 單行<br>現代傑作叢書第六編 | 鳳鳴社 |
| 仝 | 紅玉<br>（酸葉、公孫樹下、柳小島、月夜、紅玉、） | 合卷 | 植竹書院 |
| 仝 | 鏡花集第四卷<br>（照葉狂言、黑百合、錦帶記、吉原新話、揚柳眼、取舵、） | 合卷 | 春陽堂 |
| 一月 | 大正三年<br>參宮日記<br>二挺鼓 | 單行 | 春陽堂 |





| | | | |
|---|---|---|---|
| 仝 | 魔法壜 | 新小說第十九年一卷 | 春陽堂 |
| 仝 | 第二蔓蒴本 | 新日本第四卷一號 | 富山房 |
| 公 | 鳥笛<br>公孫樹下つゞき | 臺灣愛國婦人第六十二號 | 愛國婦人會臺灣支部 |
| 仝 | 正月の思出 | 臺灣愛國婦人第六十二號 | 愛國婦人會臺灣支部 |
| 二月 | 革鞄の怪<br>片袖 | 淑女畫報第三卷二號 | 博文館 |
| 仝 | 水際立つた女 | 文藝倶樂部第二十卷四號 | 博文館 |
| 三月 | みつ柏 | 演藝畫報第三卷二號 | 博文館 |
| 仝 | 春宵讀本 | 綴册 | 文友堂 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 五月 | 小袖幕 | 演藝場番組 | 大正博覽會 |
| 仝 | 黑牡丹 | 演藝場番組 | 大正博覽會 |
| 七月 | 相合傘<br>五大力、片袖（革鞄の怪）、第二菖蒲本、歌仙彫、 | 合卷 | 鳳鳴社 |
| 九月 | 日本橋 | 單行 | 千章館 |
| 十月 | 湯島境内 | 新小說第十九年十卷 | 春陽堂 |
| 十二月 | 紅葛 | 中央公論第二十九年十三卷 | 中央公論社 |
| 仝 | 袖垣<br>銀短冊、杜若、 | 合卷 | 誠文堂 |
| 一月 | 大正四年<br>櫻心中 | 新小說第二十年一卷 | 春陽堂 |





| | | | |
|---|---|---|---|
| 仝 | 櫻貝 | 淑女畫報第四卷一號 | 博文館 |
| 仝 | 雪の羽衣 | 岩手毎日新聞 | 岩手毎日新聞社 |
| 三月 | 高野聖<br>高野聖、湯女の魂、 | 合卷<br>代表的名作選集 | 新潮社 |
| 四月 | 新つや物語 | 文藝倶樂部第三十二卷五號 | 博文館 |
| 五月 | 菖蒲貝<br>春雲、春雲後刻、紬屏風、歌行燈、夜行巡査、處方秘箋、玄武朱雀、三味線堀、 | 合卷<br>現代代表作叢書第八編 | 植竹書院 |
| 仝 | 星の歌舞伎 | 女の世界第一卷一號 | 實業之世界社 |
| 六月 | 星の歌舞伎 | 女の世界第一卷二號 | 實業之世界社 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 仝 | 夕顔 | 三田文學第五卷六號 | 三田文學會 |
| 仝 | 鏡花選集 湯島詣、通夜物語、蟹系圖、 | 合卷 | 春陽堂 |
| 七月 | 星の歌舞伎 | 女の世界第一卷三號 | 實業之世界社 |
| 仝 | 蒔繪もの | 新小說第二十年七卷 | 春陽堂 |
| 仝 | 古典趣味の行事 | 臺灣愛國婦人第八十號 | 愛國婦人會臺灣支部 |
| 八月 | 松聲深く芥浪靜けき逗子より | 時事新報 | 時事新報社 |
| 仝 | 星の歌舞伎 | 女の世界第一卷四號 | 實業之世界社 |
| 九月 | 星の歌舞伎 | 女の世界第一卷五號 | 實業之世界社 |





| | | | |
|---|---|---|---|
| 仝 | 懸香 | 新小說第二十年九卷 | 春陽堂 |
| 十月 | 星の歌舞伎 | 女の世界第一卷六號 | 實業之世界社 |
| 仝 | 遊里集 白鷺、紫手綱、辰巳巷談、葛飾砂子、三尺角、逢ふ夜、糸遊、酸漿、第一蔓蒟本、第二蔓蒟本、南地心中、 | 合卷 | 春陽堂 |
| 十一月 | 星の歌舞伎 | 女の世界第一卷八號 | 實業之世界社 |
| 十二月 | 星の歌舞伎 | 女の世界第一卷九號 | 實業之世界社 |
| 一月 | 白金之繪圖 大正五年 | 新小說第二十一年一卷 | 春陽堂 |
| 仝 | 長さん 俠言 | 岩手日報 | 岩手日報社 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 仝 | 鏡花双紙 | 月下頃、三枚續、さゝ蟹、鐘聲夜半鐘、波かしら、剃子、そば、三人客、柳小島、風流蝶花形、草迷宮、笈摺草紙、鼻題目、藥草取、千鳥川、鶴の妻（千歳の鉢） | 合卷 | 春陽堂 |
| 二月 | 錦染瀧白糸 | | 趣味の友第一卷二號 | 趣味の友社 |
| 四月 | 浮舟 | | 新小説第二十一年四卷 | 春陽堂 |
| 仝 | 照葉狂言 | 照葉狂言、水鶏の里、縁結び | 合卷 | 春陽堂 |
| 五月 | 柏奇譚 | | 三田文學第六卷五號 | 三田文學會 |
| 六月 | 柏奇譚 | | 三田文學第六卷六號 | 三田文學會 |





| | | | |
|---|---|---|---|
| 仝 | 摩耶山記 | 峰茶屋心中の一節 | 邦樂第二卷三號 | 邦樂社 |
| 七月 | 摩耶山記 | | 邦樂第二卷四號 | 邦樂社 |
| 仝 | 人魚の祠 | | 新日本第六卷七號 | 富山房 |
| 八月 | 星の歌舞伎 | | 單行 | 平和出版社 |
| 九月 | 島田髷の人形 | 正本日本橋の一節 | 産業評論第三號 | 産業評論社 |
| 十月 | 萩薄内證話 | | 新小説第二十一年十卷 | 春陽堂 |
| 仝 | 愛染集 | 日本橋、註文帳、 | 合卷 | 千章館 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 仝 | 由緣文庫 | 合卷 | 春陽堂 |
| | 梟物語、龍潭譚、夕顔、櫛卷、印度更紗、不知火（懸香）、霰ふる、柏奇譚、松風（靈象）、櫻貝、白金と繪圖、夜叉ヶ池、月夜遊女、銀短册、 | | |
| 十一月 | 通路 | 文藝倶樂部第廿二卷十五號 | 博文館 |
| 十二月 | 木曾の紅蝶 | 文藝倶樂部第廿二卷十六號 | 博文館 |
| 仝 | 「流轉のはじめ」序 | 流轉のはじめ | 須原啓興社 |
| 一月 | 大正六年 町雙六 | 新小說第二十二年一卷 | 春陽堂 |
| 仝 | 雨夜の姿 | 淑女畫報第六卷一號 | 博文館 |



欠

欠

| | | | |
|---|---|---|---|
| 四月 | 茸の舞姫 | 中外第二卷四號 | 中外社 |
| 五月 | 若松屋挨拶 | 報條 | 若松家 |
| 六月 | 鏡花隨筆 | 合卷 | 文武堂 |

緣日、手帳四五枚、錢湯、畫の裡、花間文字、鑑定、ばけ鰻、雪衣の鸚鵡、曦野、買はれし女、狐、青切符、蝸の妻（千歲の鉢）、矢來町、茗荷谷、長屋烏、蕩、月夜、妙の宮、箕谷、紫陽花、毬栗（陰家、赤蛙）、道中一枚繪（其一）、道中一枚繪（其二）、海の鳴る時（捐物語）、人參、夫人堂あんころ餅、夏の水、甲冑堂、魅室、良夜、喜多八のために、麗姫、愁粧、蘆の葉釣、序類

怪談集の序、デモ畫集序、序、妖怪畫展覽會、

| | | | |
|---|---|---|---|
| 仝 | 日本橋 | 縮册 | 春陽堂 |
| 仝 | 鴛鴦帳 | 單行 | 至善堂 |
| 七月 | 芍藥の歌 | 大和新聞 | 大和新聞社 |
| 仝 | 愛艸集 | 合卷 | 春陽堂 |
| | 白羽箭、化鳥、艶書、廊下の君、妖術、山僧、暗まぎれ、山中哲學、祇園物語（笹色紅）、そら解、お留守さま、三味線堀、 | | |
| 仝 | あの紫は | 赤い鳥第一卷一號 | 赤い鳥社 |

八美人改版の序、贅、朧夜の頃序、通夜物語興行の告條一葉の墓、いろ扱ひ、左の窓、怪力、蓼搗、吉辭果、





| | | | |
|---|---|---|---|
| 九月 | 鏡花集第五卷 | 鏡花双紙改題 | 春陽堂 |
| 十月 | 裏着て通る | 赤い鳥第一卷四號 | 赤い鳥社 |
| 仝 | 大阪まで | 新小説第二十二年十卷 | 春陽堂 |
| 一月 | 大正八年 由緣の女 | 婦人畫報第八年一月卷 | 東京社 |
| 仝 | 友染集 | 合卷 | 春陽堂 |
| | 萩薄内證話、三人連れ、稽古扇、町鯉、六、卯辰新地、天守物語、高桟敷、紅提灯、繼三味線、悪獸篇、黒髪、友染火鉢、茸の舞姫、水曾の紅蝶、 | | |
| 二月 | 由緣の女 | 婦人畫報第八年二月卷 | 東京社 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 三月 | 紫障子 | 新小說第二十三年三卷 | 春陽堂 |
| 仝 | 堀の鷗 | 中央文學第三年三號 | 春陽堂 |
| 仝 | 芍藥の歌 | 單行 | 春陽堂 |
| 四月 | 續紫障子 | 新小說第二十三年四卷 | 春陽堂 |
| 仝 | 由緣の女 | 婦人畫報第八年四月卷 | 東京社 |
| 五月 | 由緣の女 | 婦人畫報第八年五月卷 | 東京社 |
| 仝 | 五月 | 婦女界第十九卷五號 美文十二ヶ月 | 婦女界社 |
| 仝 | 柳の横町 | 大阪朝日新聞 | 大阪朝日新聞社 |





| | | | |
|---|---|---|---|
| 六月 | 六月 | 婦女界第十九卷六號 美文十二ヶ月 | 婦女界社 |
| 仝 | 由緣の女 | 婦人畫報第八年六月卷 | 東京社 |
| 七月 | 由緣の女 | 婦人畫報第八年七月卷 | 東京社 |
| 仝 | 七月 | 婦女界第二十卷一號 美文十二ヶ月 | 婦女界社 |
| 仝 | 紅葉先生の追憶 | 中央文學第三年七號 文豪追想號 | 春陽堂 |
| 八月 | 八月 | 婦女界第二十卷二號 美文十二ヶ月 | 婦女界社 |
| 仝 | 「中央文學」の題 | 中央文學第三年八號 | 春陽堂 |
| 仝 | 由緣の女 | 婦人畫報第八年八月卷 | 東京社 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 九月 | 九月 | 婦女界第二十卷三號 美文十二ヶ月 | 婦女界社 |
| 仝 | 由緣の女 | 婦人畫報第八年九月卷 | 東京社 |
| 仝 | 手習 | 新小說第二十三年九卷 | 春陽堂 |
| 仝 | 緣日商品 | 夜の東京 | 文久社 |
| 十月 | 十月 | 婦女界第二十卷四號 | 婦女界社 |
| 仝 | 由緣の女 | 婦人畫報第八年十月卷 | 東京社 |
| 仝 | 雨談集 柳の廣町、新通夜物語、人魚の嗣、戀女房、時雨の姿、歌仙彫、紫障子、 | 合卷 | 春陽堂 |





| | | | |
|---|---|---|---|
| 十一月 | 十一月 | 婦女界第二十卷五號 美文十二ヶ月 | 婦女界社 |
| 仝 | 由緣の女 | 婦人畫報第八年十一月卷 | 東京社 |
| 十二月 | 十二月 | 婦女界第二十卷六號 美文十二ヶ月 | 婦女界社 |
| 仝 | 由緣の女 | 婦人畫報第八年十二月卷 | 東京社 |
| 一月 | 一月 大正九年 | 婦女界第二十一卷一號 月令十二態 | 婦女界社 |
| 仝 | 伯爵の釵 | 婦女界第二十一卷一號 | 婦女界社 |
| 仝 | 江戸土產 | 新小說第二十四年一卷 | 春陽堂 |
| 仝 | 由緣の女 | 婦人畫報第九年一月卷 | 東京社 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 二月 | 二月 | 婦女界第二十一卷二號 月令十二態 | 婦女界社 |
| 仝 | 由緣の女 | 婦人畫報第九年二卷 | 東京社 |
| 三月 | 三月 | 婦女界第二十一卷三號 月令十二態 | 婦女界社 |
| 仝 | 續江戸土產 | 新小說第二十四年三卷 | 春陽堂 |
| 仝 | 由緣の女 | 婦人畫報第九年三月卷 | 東京社 |
| 仝 | 神樂坂魚德新築開店御披露 | ひきふだ | 魚德 |
| 四月 | 四月 | 婦女界第二十一卷四號 月令十二態 | 婦女界社 |
| 仝 | 由緣の女 | 婦人畫報第九年四月卷 | 東京社 |





| | | | |
|---|---|---|---|
| 五月 | 五月 | 婦女界第二十一卷五號 月令十二態 | 婦女界社 |
| 仝 | 由緣の女 | 婦人畫報第九年五月卷 | 東京社 |
| 仝 | 賣色鴨南蠻 | 人間第二年五月號 | 人間社 |
| 六月 | 六月 | 婦女界第二十一卷六號 月令十二態 | 婦女界社 |
| 仝 | 由緣の女 | 婦人畫報第九年六月卷 | 東京社 |
| 七月 | 七月 | 婦女界第二十二卷一號 月令十二態 | 婦女界社 |
| 仝 | 由緣の女 | 婦人畫報第九年七月卷 | 東京社 |
| 仝 | 役者本位が變らねば | 新演藝第五卷七號 かういふ芝居が見たい | 玄文社 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 仝 | 私の事 | 時事新報 | 時事新報社 |
| 八月 | 八月 | 婦女界第二十二卷二號<br>月令十二態 | 婦女界社 |
| 仝 | 由緣の女 | 婦人畫報第九年八月卷 | 東京社 |
| 九月 | 九月 | 婦女界第二十二卷三號<br>月令十二態 | 婦女界社 |
| 仝 | 由緣の女 | 婦人畫報第九年九月卷 | 東京社 |
| 十月 | 十月 | 婦女界第二十二卷四號<br>月令十二態 | 婦女界社 |
| 仝 | 由緣の女 | 婦人畫報第九年十月卷 | 東京社 |
| 仝 | 瓜の涙 | 國粹第一號 | 國粹出版社 |





| | | | |
|---|---|---|---|
| 仝 | 榲桲に目鼻のつく話 | 現代第一卷一號 | 大日本雄辯會 |
| 仝 | 銀燭集<br>日本橋、名媛記、紫陽花、吉祥果、五大力、海の使者、伯爵の釵、鴛鴦帳 | 合卷 | 春陽堂 |
| 十一月 | 十一月 | 婦女界第二十二卷五號<br>月令十二態 | 婦女界社 |
| 仝 | 由緣の女 | 婦人畫報第九年十一月卷 | 東京社 |
| 仝 | 榲桲に目鼻のつく話 | 現代第一卷二號 | 大日本雄辯會 |
| 十二月 | 十二月 | 婦女界第二十二卷六號<br>月令十二態 | 婦女界社 |
| 仝 | 由緣の女牲 | 婦人畫報第九年十二月卷 | 東京社 |
| 仝 | 唄立山心中一曲 | 改造第二號十二卷 | 改造社 |

| | | |
|---|---|---|
| 年代不明 | 戸崎町七不思議 | 九州實業新聞 |
| | 行々子 | 九州實業新聞社 |
| | 鮒の牲 | |
| | 矢來町 山の手小景前半 | |
| | 觀音堂 | |
| | 新名所 千鳥川 | |
| | 一枚日記 | 北陸新聞 |
| | 玄武朱雀 | 北陸新聞社 |
| | 白砂青松 | |
| | 斧の舞 一人坊主 | 大學館 |
| | 青灯集 | 新潮社 |



この度作者の御許を得て「泉鏡花著作細表」を編み「蜻蛉集」の附錄としたるが永年心懸し事ながら近年旅行不在の事多く殊に數年間海外遊學中留守宅移轉の取込み等あり秘藏の書類中散逸したるもの數知れず今回取調に際し難澁を極めたり加之此頃一身愈々多忙にて詮索おもふに任せざるうち出版の日は容赦なく切迫し遂に不完全のまゝ世に出すの止を得ざるに立至りぬ脫漏勘違甚だしかるべく密に冷汗を覺ゆれども敢て急速に筆を取運びたるは之を機として大方各位の御力添を得他日完全なるものを仕上んとおもふ心に外ならず杜選の責は甘んじて擔ふと同時に補遺訂正の爲に各位の御援助を切望して止まざる次第なり

大正九年十二月

水上瀧太郎 謹白

讀者各位

追而 御心づきのかども有之候はゞ乍御手數ト記宛に御知らせ被下度希望仕候——東京芝區三田四丁目三十一番地阿部章藏

大正十年二月十日印刷
大正十年二月十五日發行
大正十年二月二十日再版發行

蜻蛉集

定價參圓五拾錢

著者　泉鏡太郎

發行者　東京市芝區三田二丁目一番地
本多貞一

印刷人　東京市芝區南佐久間町二丁目十番地
松永孫七郎

印刷所　東京市芝區南佐久間町二丁目十番地
安全印刷株式會社

發行所　東京市芝區三田二丁目一番地
電話高輪一三七番
振替口座東京四六九四九番
國文堂書店

人工コ-13

此の馬鹿、

終